

## 国内での日本語教育と海外での日本語教育 ③

## 海外での日本語教育

天理教の海外での日本語教育について述べると、まず思い浮かぶ言葉が「文化活動としての日本語教育」である。過去に中国伝道の上で日本語学校を開いた例はいくつかあるが、文化活動としての日本語教育に限っていえば、1942年に華南伝道庁の下で開校した香港天理日語学校が最初のような。日本語教育に限らず文化活動といえば様々なものがあり、2代真柱がハワイやブラジルで日本文化研究所を開設したという記録もある。現在、文化協会はパリとニューヨークに設置されていて、日本語教育だけでなく茶道、華道、書道などの文化活動も展開されている。それ以外にも筆者の知る限りでは、シンガポール天理文化センターの日本語教室やブラジル伝道庁、台湾伝道庁、コロンビア出張所、メキシコ出張所、タイ出張所、オセアニア出張所、インドネシア出張所、フィリピン出張所などでも日本語教室が開かれている。また、ネパール連絡所では歴代所長が国立トリブバン大学に出向して日本語講師を勤めており、パラグアイに日本語教師を派遣していた。それぞれ規模や形態は違うが、長い歴史を持っていると言える。

## どうして日本語教育なのか

文化活動の一つとして日本語教育があげられるが、それが海外布教とどのようにつながっているのか考えてみたい。海外布教といっても、布教師が行こうとする国は様々で、国の事情も様々である。天理教の布教が公認されている国で布教師としての滞在ビザが下りる国もあれば、そもそも布教が禁止されている国もある。長期滞在ができなければ布教したくてもできないわけで、渡航先によって大きく事情が違う。筆者も出向していた経験があるので、パリを例に話をすることにしたい。

ヨーロッパ布教は、1910年に船場大教会から3人の布教師がロンドンに派遣されたことから始まるが、このときの布教は実を結ぶことはなく、それから長い間、ヨーロッパ布教の道は閉ざされていたようである(『天理教パリ出張所20年誌』9頁)。その後、1964年に鎌田親彦(パリ出張所3代所長)が一れつ会派遣留学生として初めてパリへ行った。そして1970年7月、パリ郊外のアントニー市にパリ出張所が開設された。しかし布教の公認はまだ得られなかったため、文化活動を通しての布教という観点から1971年2月に天理日仏文化協会が設立され、その年の5月から日本語教育が始まった。これはヨーロッパで最初の私立の日本語学校である。鎌田親彦と一緒に文化協会設立に尽力した田中健三の手記に、パリでどのような文化活動を始めるか、何度も話し合いを繰り返したことが書かれている。そしてやはり日本語学校がいいであろうという結論に達し、開校に結びついたようだ(『天理教パリ出張所20年誌』26頁)。また講師陣も斎藤修一、北條淳子、石田敏子など日本語教育の第一人者といわれるような専門家を迎えている。そしてフランス政府から布教公認を得られたのは、1975年11月4日だった(『海外布教伝道部報』第142号)。ここまでこぎつけるのに相当な苦労があったようだが、その活動の始まりが現在までしっかりと受け継がれ、現在ではパリの中心であるシャトレで規模も拡大し、文化活動が続けられていることに歴史を感じずにはいられない。

## 文化活動を通しての布教

『天理教パリ出張所20年誌』を読んでいて興味深い文章を見つけた。天理日仏文化協会の最初の会員登録をして、現在のヨーロッパ出張所(旧パリ出張所)の神殿設計を担当したジャンフランソワ・ラフォン氏の寄稿である(原文フランス語の日本語訳、31頁)。

1970年代初め頃までのフランス人にとって、日本は今日より遙か遠い国と感じられていた。私は、随分前から、古代エジプト文明のような、大変不可思議な文明に対して興味を持っていた。最初の授業が始まり、その時点から、私の見方は完全に変わっていった。授業のなかで先生たち(斎藤先生と北条先生)は、フランス語を一言も使わずに「コレハ、ツクエデス。コレハ、イスデス。」という簡単な文章から出発して、日本の日常的に使われる言葉で、次第に複雑な文章へと進んでいった。やがて私は、アントニーの天理教の家へ行き、日本の人たちと友情で結ばれ、したがって、日本を覆い隠していた神秘的なペールは、次第に消えて行った。

ヨーロッパの、しかもキリスト教社会でもあるフランスで、アジアの日本の新宗教である天理教が認められるようになるのは簡単なことではない。フランスではカルトの侵入に対し非常に警戒している。そういった中で、まずは怪しくもなければ、危険な思想を持っている団体でもないことを理解してもらわなければならない。しかしこれは簡単なことではなく、時間も非常にかかるものだ。その中で信頼を得て活動していくには、理解してもらえる地道な活動を続けて行くしかない。上記のラフォン氏の寄稿のように、当時の日本に対しては不可思議な文明を持つ遙か遠い国という認識である。興味はあっても警戒心もあったように思う。そのような状況でまずは接点を作り、人間的な交流を深め、いろいろ理解してもらうには日本語教育が最適であったのではないかと思う。また学校という形式を取れば長期にわたる交流もでき、授業を通して信頼関係も生まれる。まずは理解者を作り、そこから教えを心に修め、実践していき人を作ろうというスタンスで行っている活動だと言える。

## 文化協会での活動

筆者が赴任したのは1990年～92年だが、日本語教育はもとより、ギャラリー、図書室、書道・華道の講座、日本料理、尺八の演奏会など様々な活動が行われていた。調べてみると1971年から文化活動として、①天理日本語学校、②日本語教育相談室、③書道講座、④図書館、⑤映画会、⑥テレビ映画鑑賞会、⑦日仏懇親会、⑧テレビまんが会、⑨講演会、⑩展示コーナー、⑪季刊『ル・ジャポン』発行などが行われていた(『海外布教伝道部報』第179号)。それ以外にも、筆者が赴任中のことであったが、パリで行われる柔道大会などで恵まれない子供たちの救援募金を集める活動なども行っていた。募金してくれた人に毛筆で名前を書くサービスで、名前を聞いて半紙にカタカナで書くのだが、不思議そうに見つめて、書き終わって半紙を渡すと満面の笑みが返ってきたことが思い出される。大きい活動から小さい活動まであげればきりがなく、いろいろな活動が展開されていたように思う。また1991年には日本大使館、国際交流基金の後援を得て、第9回エキスポラングに初めて日本語部門のブースを開いて日本語教育のアピールに貢献したこともある。当時、岩切耕一文化協会長が積極的に様々な文化活動を展開していた。